

2018年11月13日(火)・14日(水)の2日間、神戸大学百年記念館にて膜シンポジウム2018を開催致しました。207名という多くの参加者をお迎えし、口頭30件とポスター91件、合わせて121件の発表がありました。盛況の内に成功裏に終えることができましたことをご報告申し上げますとともに、ご参加頂いた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

膜シンポジウムは、日本膜学会会則の第4条に謳われておりますように「膜に関する広い分野での情報や知識を交換することにより、会員の連絡提携の場となり、この方面の研究を飛躍的に発展させる」ための手段の一つと位置づけられており、特に、数ある膜研究の分野に依らず、あらゆる「膜」に携わる人々が領域の垣根を越えて深く議論する機会と考えられます。このような膜シンポジウムの理念を鑑みて、今回の主題を「人が交(混)じる、膜は分ける」としました。発表時間は従来通り一人当たり12分とし、質疑応答に7分を割り当てましたが、様々な観点からの意見が出され、新たな研究のヒントに繋がるような議論が活発にできたのではないかと思います。人工膜・生体膜・境界領域間の交流・融合はもちろんのこと、有機・無機、理論・実験、産・学・官、基礎・応用、材料・プロセス、そして若手・ベテランなど、様々な興味や経験・知識を有する研究者・技術者が議論と意見交換できる場にしたいという思いでしたが、非常に多くの方にご参加いただき、六甲ホールという大きな会場ですべての発表にすべての参加者が立ち会うという、膜シンポジウムならではのスタイルだからこそ得られる貴重な機会であったかと思います。

一方、2012年から始まり今回で7回目を数えるポスターセッションを初日に開催しました。また、2014年から始まった恒例の1分間のショートプレゼンテーションを今回も実施しました。ただし、ショートプレゼンは学生のみ必須とし、一般のポスターは任意としました。学生の中には1年以内に膜学会から表彰されており、審査対象とはならない発表もありましたが、他の学生と分け隔てなくショートプレゼンは行っていただきました。その分時間はかかりましたが、教育的見地からは必要なことではないかと思います。全体で90分にも及ぶ長いセッションとなり、特に審査員の方々には全員の発表を見ていただきご負担をお掛けしました。全審査員がすべての発表を評価しなくとも十分公平性は保たれたかかもしれず、これは反省点としています。発表する学生も手慣れたもので、きっちり1分間に要点をまとめていました。たまに時間をオーバーするケースもありましたが、それでも十分な内容だったと思われます。ポスター会場は、ポスターパネルを2列にして、会場全体が見通せるような配置としました。各所で白熱した議論が展開され、熱気に溢れていたのが印象的でした。学生賞の詳細に関しては、選考委員長の馬越大先生(大阪大)と受賞者の皆さんからの報告が本誌に記載されていますのでご参照下さい。

懇親会は大学内の瀧川記念学術交流会館にて開催し、57名のご参加を頂きました。会長の松山秀人先生(神戸大)からのご挨拶に続いて前々会長の都留先生(広島大)に乾杯の御発声を頂戴して、新谷先生(神戸大)の司会の元で終始和やかな雰囲気でした。地元の料理教室の先生にご協力をいただき、他所ではあまり見かけないような創作料理に舌鼓をうちつつ、神戸の夜景を肴に親睦を深められたことと思います。ここでも、文字通り「人が交(混)じる」ことが叶った懇親会でした。

最後となりましたが、運営副委員長の馬越先生、事務局の渡部様、研究室の中川敬三准教授、新谷卓司特命教



開会挨拶
実行委員長



ポスター発表



懇親会 挨拶
会長 松山先生



懇親会 乾杯
前々会長 都留先生



次期シンポジウム
委員長 馬越先生

授，稲田飛鳥学術研究員とアルバイトの学生さん，および神戸大学工学振興会の皆様にはたいへんお世話になりました。改めて感謝の意を表したいと思います。

次回の年会（早稲田大学）は第41回，膜シンポジウム（大阪大学）は第31回となります。年号も変わり新たな時代の幕開けとなる節目の年を迎える両会議においても，分ける膜を通して人が交（混）じることにより，膜の科学と技術の更なる発展がもたらされるものと確信しております。